協調的幸福感の文化比較

—コスタリカ・日本・オランダの比較—

一言英文

(福岡大学)

Key words: Happiness, Culture, Cultural Values

目 的

幸福感の意味づけには個人主義文化と集団主義文化の違いが存在する。先行研究では東アジアと北米の比較が主流であったが、本来この文化の次元は世界中の国々の間に存在する。そこで本研究では、より大きな個人主義-集団主義の分散を捉えるため、Hofstede (2001) の価値観の国文化次元が大きく異なる日本 (IDV=46)、オランダ (IDV=80)、コスタリカ (IDV=15) の3カ国を対象とした。この3カ国において協調的幸福感と全般的な幸福感 (主観的ウェル・ビーイング) を測定した。

国の GDP と主観的ウェル・ビーイングの関係を検討した Inglehart, Foa, Peterson, & Welzel (2008) によれば、コスタリカを含むラテン・アメリカ文化では幸福度が高く、次いでオランダなど欧州諸国、そして日本の順に幸福度が高い。ここで、協調的幸福感とは、集団主義文化の成員が意味づける幸福の含意を反映した項目で構成されている (Hitokoto & Uchida, 2015)。従って、集団主義文化での生活は協調的幸福感の得点を高くすることが予想されるので (Hitokoto & Uchida, in press)、各国の社会人の尺度得点を比較した場合、コスタリカ>日本>オランダの順で得点が高くなることが予想される。すなわち、主観的ウェル・ビーイングと協調的幸福感で、異なる国差が確認されるという仮説に立ち、これを検討した。

方 法

■参加者： オランダ人社会人 46 名 (うち女性 25 名、平均年齢 60.5 歳)、日本人社会人 160 名 (うち女性 78 名、平均年齢 54.8 歳)、コスタリカ人社会人 100 名 (うち女性 63 名、平均年齢 46.4 歳) を調査対象とした。以下の分析結果は、国の違いを性別と年齢で統制しても同様であった。

■質問紙： 協調的幸福感尺度 (9 項目、5 段階評定) は「自分だけでなく、身近なまわりの人も楽しい気持ちでいると思う」などの項目 9 項目 (0: 全くあてはまらない~4: かなりあてはまる) を用いた。分析では、項目の平均値を用いた。主観的ウェル・ビーイング (1 項目、10 段階評定) は「現在、あなたはどれくらい幸せですか?」という 1 項目 (0: とても不幸せ~10: とても幸せ) に対する評価で定義した。項目の翻訳は、各国の専門家との協議及び逆翻訳により作成した。協調的幸福感の内的整合性は日本で $\alpha=0.76$ 、オランダで $\alpha=0.57$ 、コスタリカで $\alpha=0.67$ であった。

■手続き： 人口規模で調査地域を抽出し、当該地域にて、日本では住民基本台帳閲覧で個人を、他の2カ国ではエリア・サンプリングにより世帯抽出した上で世帯内から個人を抽出する層化多段無作為抽出法を用いて抽出した。

結 果

主観的ウェル・ビーイングはコスタリカ>オランダ>日本の順で得点に国差が確認された ($F(2, 303)=19.94$, $p<.001$)。下位検定の結果、3カ国それぞれの間に有意な得点差が認められた ($p<.05$)。次に、協調的幸福感を比較した結果、仮説の通り、コスタリカ>日本>オランダの順で得点に国差が確認された ($F(2, 303)=13.88$, $p<.001$)。下位検定の結果、3カ国それぞれの間に有意な得点差が認められた ($p<.05$)。すな

図1 主観的ウェル・ビーイングと協調的幸福感の三カ国比較。

Note. エラーバーは±1 標準誤差を表す。

わち、本研究は主観的ウェル・ビーイングの得点については従来の研究から示唆されるような国差を再現し、協調的幸福感については、それとは異なる国差で仮説を支持する結果であった。これらの結果より、協調的幸福感とは、従来の主観的ウェル・ビーイングに比べて、集団主義文化の成員で高く維持されている幸福感であると考えられる。

考 察

協調的幸福感の先行知見に位置づけてこの結果を解釈すると、参加数や代表性が確保された調査ほど、平均値の国差が理論どおり集団主義文化で高いという結果になっている。また、協調的幸福感と年齢の相関係数を検討したところ、コスタリカと日本では正の ($p<.05$)、オランダでは負 ($p=n.s.$) の相関関係が見られたが、日米間でも同様の年齢との相関が確認されている (Hitokoto & Uchida, in press)。これらは、協調的幸福感が、①集団主義的文化であるほど強く感じられ、②成人期以降の対象者で強く感じられることを示唆している。すなわち、協調的幸福感とは集団主義文化の主流生活の中で感じられる幸福感であると考えられる。

本研究では尺度に内的整合性の問題があった。項目削除時の内的整合性を検討した結果、オランダとコスタリカにて項目「人に迷惑をかけずに自分のやりたいことができている」に問題があることが分かった。特に「迷惑」という文化的含意の複雑な単語の翻訳/文化間等価性に改善の余地がある可能性が高い。なお、この項目を削除した得点を用いた場合の結果も、上述と同様であった。

References

- Hitokoto, H., & Uchida, Y. (2015). Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies*, 16(1), 211-239.
- Hitokoto & Uchida (in press). Interdependent happiness: Progress and implications. In M. Demir, & N. Sümer (Eds.). *Close Relationships and Happiness across Cultures*. NY: Springer.
- Hofstede, G. (2001). *Culture's consequences*. CA: Sage.
- Inglehart, R., Foa, R., Peterson, C., & Welzel, C. (2008). Development, Freedom, and Rising Happiness: A Global Perspective (1981-2007). *Perspectives on Psychological Science*, 3(4), 264-285.

■本研究は、公益財団法人トヨタ財団研究助成プログラムへの助成を受けて実施された。

(Hidefumi HITOKOTO, Yoshiaki TAKAHASHI)